

政治と哲学或いはプラトーン『ポリテイアー』（『国家』篇）
に於ける「正義」と「魂」不滅

——予備的諸考察(II)——

永井健晴

〔目次〕

序

I. 古典古代世界とポリス共同体

1. 古典古代世界のストイケイア（エレメンテ）——自然的・歴史的諸条件
2. 「共同体」とその「古典古代的形態」の概念規定
3. 「ポリス共同体」に於ける「エレウテリアー」（自由）概念
4. アテーナイオイの「デーモクラティアー」

中間的考察——古典古代・西欧近代・啓蒙の弁証法

II. 『ポリテイアー』の構成と展開

1. 主題とライト・モティーフ
2. 構成と展開

(1) 『ポリテイアー』の構成

(2) 正義論(I)

- へa) ケファロスとポレマルコス、へb) ソフィステース・トゥラシュマコス、不正の弁証(1) へc) シュノントーン・グラウコン、不正の弁証(2) へd) シュノントーン・アデイマントス、不正の弁証(3)
- (3) ポリス論(I)

政治と哲学或いはプラトーン『ポリテイアー』（『国家』篇）に於ける「正義」と「魂」不滅

へa)「豚どものポリス」、ポリス・モデル(1)へb)「贅沢なポリス」、ポリス・モデル(2)へc)「浄化されたポリス」、ポリス・モデル(3)、「1」「魂」の教育(陶冶)(以上前号)「2」制度

(4) 正義の根拠付け(哲人王論・イデア論)(以下次号)

(5) ポリス論(II)

へa)優秀者支配 へb)その墮落形態(名譽制、寡頭制、民主制、僭主制)

(6) 正義論(II)

「魂」不滅

結

〔承前〕

〔2〕制度

プラトーンの構想する「浄化されたポリス」(ポリス・モデル3)の中核を成すのは、「魂」の浄化された「ヒュラクス」(守護者)である。彼等の「魂」の浄化は、その素質(ヒュシス)を備える者達に対する、生涯に渉る体系的「教育」によって、果たされる。この「教育」の目標は、「魂」に於て、医者(イアートロス)や裁判官(ディカステース)を必要としない、即ち、病氣(ノソス)や放埒(アコラシアー)に支配されない、自己制御能力や自律的判断能力を備える人間を造ることである。換言すれば、それは、「自分が用いるべき正義(ディカイオン)を他の人々から借り入れざるを得ず、そういう他人を自らの主人・判定者となし、自分自身の内には訴えるべき正義を何も持たない」(405B)⁽¹⁾というよ⁽¹⁾うな、恥ずべき無教育状態(アパイデウシアー・アイスクレー)に陥ることのない人間を、自己形成せしめることである。この「ポリス・モデル(3)」に於いては、「教育」の在り方(教育制度)は、この「モデル」全体の在り方(諸制度)と、相互に規定し合っている。

将来の「ヒュラクス」たるべき少年達（パイデス）に対する、「少年期教育」（パイディア）は、上述のように、「身体教育」（ギムナスティケー）と「音楽・文芸教育」（ムーシケー）から成る。その眼目は、少年達の素質（ヒュシス）としての、潜在的且つ内発的な適性・能力（アレテー）の所在を見定め、それを適切に自己開花せしめることである。身体の鍛練や情操の涵養は、それ自体が目的ではない。その目的は、一方で、言わば「アイデンティティ形成」の基軸となる、「勇氣」（アンドレイアー）と「節度」（ソーフロシユネー、恐怖や欲望に対する自己制御能力）を、他方で、それらに照応する「ピステイス」（より優れたもの・より善きもの、ベルティーオン・アメイノンに対する従順・信頼・廉直、Redlichkeit）を、自己陶冶せしめることである。換言すれば、それは、少年達の「魂」の内発性を損なわないように配慮しながら、優れた（就中「正義」の）モデル（パラダイクマ、範型）として、善き内容の「教材」を厳しく選び抜き、それらを彼等に適切に「模倣」（ミメースタイ）させることにより、「善き生活リズム」（リュトモス・アガトス）と「善き生活習慣・品位」（エートス・アガトス）とを、とりわけ「身体と感性」に於て、練成させることである。⁽²⁾

この「パイディア」は、この「ヘポリス・モデル（3）」に於ては、基本的に、「ヒュラクス」と成るべき者達に対する「基礎教育」の意味を持っている。だが、それは、同時に、この「ポリス」の全構成員の子弟に対する「少年期教育」でもなければならぬであろう。プラトーンの叙述は、前者に関心が集まっているので、この点に就いて必ずしも明示されてはいないが、論理のしからしめるところ、この「ポリス」モデルにあつては、後者が不可欠だからである。この問題は、この「ヘポリス・モデル（3）」全体を構成する、「ヒュラクス」層と自余の「生産者」層それぞれの在り方と、両者の関係のそれとへ、注意を向けさせる。

結論を先取りするならば、この「生産者」層は、この「ヘポリス・モデル」に於ては、その構成上、この「ポリス」の存立に不可欠な、構成員（ポリータイ）であり、「奴隸」ではない。即ち、この両層、「フュラクス」層と「生産者」層

とは、ここでは確かに、〈階層〉関係にあるが、しかし所謂ヘゼロ・サム〈関係、即ち階級的支配関係にあるのではない。ここでは、一方で、「ヒュラクス」層は、〈家父長として奴隷を所有し支配する〉(dominus)と意味での、〈主人〉(dominus)ではないし、況んやヘーゲルの所謂〈主と奴の弁証法〉に於ける〈主人〉(Herr)のような、「自己意識」の「即自態」としての単純な〈欲求の主体〉でもない⁽³⁾。他方で、ここでの「生産者」層は、そうした外なる〈主人〉の〈暴力〉とこれによる〈死〉への恐怖とからのみ、その外なる〈主人〉の「欲望」に隷属する〈奴隷〉(Knecht)ではないし、又、自己制御されない「欲望」という自己自身の内なる〈主人〉に全く隷属する〈欲望の奴隷〉でもない。

〈ポリス・モデル〉(3)に於ては、「生産者」層の「パイデス」(子弟)も又、「ヒュラクス」層のそれと同様に、「パイデアー」(少年期教育)によって、少なくとも、「欲望」を自己制御し、〈より優れたもの・より善きもの〉(ベルテイーオナ・アメイノナ)とそうでないものとを的確に識別して、〈より優れたもの・より善きもの〉に自発的に従う能力(「ソーフローシュネー」)を備えるようになっていくかぎりで、将来、両層間の、確かに〈階層〉的ではあるが、しかし、或る意味で(本質的には)相互的(リシプロカル)な、関係が成立する。従って、その場合、「生産者」層の「ヒュラクス」層に対する〈信従〉の自発性(Spontanität)が、後者の〈暴力〉や〈操作〉によって調達されているのではないかぎり、両者の関係は、所謂「階級支配」関係(Klassenherrschaft)ではあり得ない。逆に言えば、それが「階級支配」関係でない以上、将来「生産者」層となる「パイデス」にも「パイデアー」が不可欠なのである。

プラトンは、この「浄化されたポリス」モデルを構成する両層(ないし諸層)に関して、ソークラテースをして、所謂〈建国神話〉を語らしめている。(414B, ff.)⁽⁴⁾これは、「適切に用いられるべきフセウドス(虚構、擬制)」として、プラトーンによって自覚的に語られている、或る意味では全く単純素朴ではあるが、しかし、プラトーンの〈ポリス・モデル〉(3)を理解する上では極めて重要な、「神話」(ミュートス)の一つである。これは、単なる荒唐無稽な「物語」

でも、或るいは「階級支配」のための単なるイデオロギーでもないであろう。結論を先取りするなら、ここでは、内容的に二つの事柄、即ち、この「ポリス」を構成する「ポリータイ」の属性である、「共同性」と「差異性」との意味が、「比喩」(メタフォラー)を用いて、叙述されているのである。

まず第一に、この「神話」によると、この「ポリス・モデル(3)」を構成する全ての者(ポリータイ)は、母なる「大地」(デー)の胎内で「塑造され育成され」(プラットメノイ・カイ・トレフォメノイ)、そこですっかり仕上げられてから、日の光の下に送り出される。即ち、彼等は、「母なる大地から産み出される者達」(ゲゲナイ)であり、母を同じくする「兄弟姉妹」(アデルフォイ)である。

この「神話」を、ポッパ等に於けるように、根拠のない「民族の神話」或るいは全体主義的イデオロギーと決めつけて解釈しなければならぬ根拠は、必ずしもない。「大地」の上で「ポリータイ」と成るであろう諸々の塑像(プラスマ)は、明るい日の光の下に誕生する以前に、冥い地の下で、塑像家(プラステース)たる「神」(テオス)によって「へす」で「造形されてしまっている(プラステーナイ)」という「物語」によって、プラトンは、まず何よりも、次の点に注意を喚起している。即ち、人間は、自らが選択しない、ある特定の時処に於て、ある特定の資質を「へす」で「与えられて、つまり、少なくとも自覚的には、自らの意思とは無関係に、産み落とされる、という「事実」は、人知の及び難い「主体」(faciens)による「行為結果」(事実) factum であり、従って、それが、何故そうでありそれ以外ではあり得ないのか、ということとは、人知では推し量ることができない、という点に。そして、「ポリータイ」は、母を同じくする「アデルフォイ」(兄弟姉妹)である、という「物語」が示唆している事柄は、単に彼等相互間に文字通りの「親近性」(Verwandschaft)がある、ということに尽きない。それは、人間存在に関して、生物学的意味での、「種」内の諸「個体」の「同型」性ばかりでなく、「ポリスの動物」(ゾイオン・ポリティコン)としての人間の「本源的共同性」、即ち

人間の「生きる意味」を可能にする「アイデンティティ形成」の基礎となる、言語、習俗、伝統などの「共同性」の、言わばコントラ・ファクティシユな条件をも、示唆している。

第二に、この「物語」の後段では、母なる「大地」の胎内で、かの「アデルフォイ」を造形する際に、「神」は、同じ祖型（かたち、エイドス）を用いながら、「材料」（ヒュレー）を変換することで、様々な塑像（プラスマ）を造り出した、とされている。即ち、彼等は、「金」が混ぜられると、「統治者」（アルコーン）に、「銀」が混ぜられると、「補助者」（エピクローイ）ないしは「援助者」（ポエートイ）に、そして「銅」ないし「鉄」が混ぜられると、「農夫」（ゲオールゴイ）ないし「職人」（デーミウールゴイ）に成る、とされている。

この場合、勿論、「同型」の「ポリータイ」という枠内で、このように区分された、いずれの「タイプ」にも、一種類だけではなく、全ての「材料」が用いられているはずであり、それらの「材料」の構成比率によってのみ、「タイプ」区分がなされているはずである。何故なら、もしそうでないならば、誕生して来るものは、「人間以外の何か」（別種）であることにならざるを得ないであろうし、この「物語」でも語られているような、ある「タイプ」から別の「タイプ」が誕生する可能性は、なくなるであろうからである。

いずれにしても、この「物語」の後段では、人間の諸個体間の、生得の「資質」の、「差異」の必然性が確認されている。ここで「語られていること」は、「カースト」制、「身分」制、「階級支配」制などに於けるように、「ノモス」として、無自覚のうちにてあれ、歴史的に「明澄なる地上」で形成された、つまり「可変」の社会的「差異」ではなく、「ヒュシス」としてすでに「暗冥なる地下」で形成が完了してしまっている、つまり「不変」の自然的「差異」である。人間の諸個体は、「類」としての「共通性」と共に、その枠内での相互の「差異性」を、所与の自然的「事実」として、備えている。何故に、このような自然的「事実」がまさにこのようであって、それ以外ではあり得ないのか。このこと自

体に関しては、第一の論点と同様、人間には、〈経験〉によっても〈論証〉によっても、万人が納得せざるを得ないような説明ができない。逆に言えば、〈神〉がそれをそのようにした、という〈神話的〉な説明がなされても、それを〈経験〉によつて否定することも、アポダイクティックに否定することもできないし、又否定しなければならぬ理由もない。要するに、それで〈ある〉とも、それで〈ない〉とも〈論証〉し得ない。従つて、それがまさに自覚的に「神話」として語られているかぎりでは、それを根拠のない〈カースト〉制擁護のためのイデオロギーとして否定しようとしても、無意味である。ここで問題に成り得ることは、まさにこの〈可變的〉差異と〈不變的〉それとの間の差異を、誰が、如何にして、見極めるのか、ということ以外にはあり得ない。

所謂〈建国神話〉に於て呈示されている、上述の二つの論点に関して、プラトンは、現実離れした空想家でもなければ、不合理な現実を、意識的にせよ無意識的にせよ、是認してしまふイデオログでもなく、一見するところ、寧ろ率直で、あつげらんとしたヘリアリストである。〈ある（在る）〉ことがある（在る）ようにある（存る）ことに驚き（タウマゼイン）、それを端的に認めることが、プラトーンに限らず、古代ギリシャ哲学が共有する出発点である。プラトーンの際立つところは、人間と世界の存在の基底に於ける、神秘と迷妄の〈闇〉に就いて徹底して自覚していながら、否まさにそれ故に、寧ろ、明晰と啓蒙の眩い〈光〉へと志向してゆく、きっぱりとした意思的姿勢である。

いずれにせよ、かの「神話」の後段で言われていることは、要するに、人は様々に異なる資質や才能を持つて生まれる」ということに過ぎない。プラトーンは、この単純明快な〈事実〉から出発する。プラトーンにとつて、問題は、人間の様々な資質や才能が、様々に且つ完全に、まさにそれらがそうあるべきように開花するか否か、である。このことは、ポリスの在り方如何に掛かっている。かの「豚どものポリス」に於ては、確かに、人間に固有の潜在的諸能力は、様々な形で既に顕在化し、それらは相互補完的分業体系を言わば〈即自的〉に成している。しかし、これは基本的に

〈閉鎖系〉であるから、ここでは、よかれあしかれ、様々な諸能力の充全なる展開の可能性は眠ったままである。これに對して、「贅沢なポリス」に於ては、この可能性はすでに現実化し始めてはいるが、その仕方は決定的に倒錯と退廢に陥る。ここでは、そうあるべきでない者がそのようにあり、そうあるべき者がそのようにない。「鉄や銅の人間がポリスのヒュラクスとなると、そのポリスは滅びる。」(415B)⁽⁵⁾プラトーンをして言わしめるならば、そのポリスが如何に繁榮を謳歌しようとも、そのポリスの内実はすでに滅んでいるのである。

母胎としての冥い「大地」の下で用意された、人間の様々な資質が、あるべきように開花し得ないのは、明るい日の光の下に於ける、人間の「魂」と「ポリス」の在り方に、そして両者の関係の仕方に、〈錯乱〉、〈ズレ〉ないし〈ブレ〉Verücktheitがあるからである。〈自然〉秩序(コスモス)或るいは「幾何学的平等」(イソテース・ゲオーメトリケー)を逸脱した〈人間〉世界の〈錯乱〉に對して、〈自然〉によって予定調和的にその秩序が回復されることなどは期待し得ないし、又すべきでもないとするれば、或るいは又、ソフィステースのように、この〈錯乱〉に居直ってしまうべきでないとするれば、人間には、よかれあしかれ、この自らの〈錯乱〉を、明晰に自覺して、それを自覺的に克服してゆく以外に、歩むべき途はない。この途を歩むために、プラトーンによって呈示されたのが、「浄化されたポリス」の〈階層〉モデルであり、その中核を占める「ヒュラクス」層に對する生涯教育プログラムなのである。

プラトーンの語らしめるソークラテースによる、「ヒュラクス」たるべき者の浄化された「魂」を形成するための、生涯教育プログラムに従えば、上で言及した二十歳迄の「パイディア」の後、さらに三十歳迄の数学、幾何学そして天文学(分析的理性、ディアノイアー)、三十五歳迄の「哲學的問答法」(弁証法的理性、ディアレクティケー)の修得が、それ以後五十歳迄は、軍事・行政に係わる実務経験が課される。⁽⁶⁾「浄化されたポリス」に於ては、「ヒュラクス」は、こうした生涯教育プログラムに従って、適格な〈德育〉と〈知育〉を受けるとともに、彼等の志操の全き堅固さは、恐怖、

労苦、競争、苦痛、快樂など、ありとあらゆる〈試練〉（*バサノス*）の中で、生涯を通じて、厳格に吟味（*バサニゼイン*）される。⁽⁷⁾「ヒュラクス」は、基本的に「戦士」であり、ポリスの外に対しては〈勇敢〉で、その内に対しては〈温和〉であって、〈私〉を徹底的に否定し〈公〉に全面的に献身し得る、能力と志操を、備えていなければならないからである。かくて、体系的に一貫した「魂」の不断のハード・トレーニングを通して、「全生涯にわたり、ポリスの利益と考えることは全力をあげてこれを行う熱意を示し、そうでないことは金輪際しようとしなない気持が見て取れるような者達」⁽⁸⁾（412 DE）が、厳しく選り抜かれる。

さて、ここで、プラトーンが描いている、「ヒュラクス」の基本的性格と機能と、そして、「浄化されたポリス」に於ける、それを構成する一社会層としての、その位置付けとに就いて、確認しておきたい。「ヒュラクス」とは、端的に言うて、「浄化されたポリス」の（「システム統合」と「社会統合」との両局面に於ける）中核的機能を担うべき者である。上述したように、「贅沢なポリス」に於ては〈欲望〉が〈必要〉の限度を越え無際限となる。ここには、まさにそれ故に、一方では、対外的被征服（戦争）と対内的無政府（内乱）、即ち〈生存の危機〉が、他方では、生きることの〈意味〉の喪失、即ち〈魂の危機〉が、潜在している。「浄化されたポリス」の形成と存立が、この「贅沢なポリス」の潜在的〈危機〉の不断の克服を課題としていとすれば、その中核的機能を果たすべき「ヒュラクス」には、まず何よりも、〈戦争〉（*ポレモス*）あるいは〈内乱〉（*スタシス*）に際して、文字通り一身を賭して、防衛と治安という〈秩序〉形成の基幹となる任務を担う「戦士」であることが期待されよう。即ち、彼がここで果たすべく期待されていることは、そこに内在する〈危機〉の緊急度からして、まず「システム統合」機能である。

この意味で、「ヒュラクス」を中核とする「浄化されたポリス」に就いてのプラトーンの叙述は、成立期の〈ポリス共同体〉（あるいはスパルテオータイのそれ）の特徴を反映させているが、それは又、（上で援用した概念を再度使うなら）

「本源的共同体」の解体以後の、〈戦争〉と〈社会的生産〉を伴う、「共同体の第二次形成」、あるいは「国家によって組織された社会」の成立、という事態の本質を的確に捉えてもいるのである。上述したように、一般に、「第二次共同体」(「ポリス共同体」は、これの歴史的に特殊な一形態である)の形成と存立は、さしあたり、その只中から析出された政治的「システム統合」機能(つまり広義の〈国家〉形成)の言わば〈対自的〉遂行によってのみ、可能となるからである。⁽⁹⁾この点に関するかぎり、プラトーンの叙述には、戦闘集団が〈生産〉からの解除されていること、つまり〈生産〉に対する〈戦闘〉の第一次性、軍事、行政そして政治の機能的未分化、つまり官僚制の未発達などの事態が見て取れるが、これらは、古代ギリシャの成立期「ポリス共同体」一般に於ける、〈征服〉による〈ポリス・国家〉の形成、比較的狭小な領土とこれに見合うだけの人口、社会的分業の限定的展開、不断の戦争状態などの、歴史的・自然的特殊事情を、少なからず反映していると言えるであろう。⁽¹⁰⁾

成立期〈ポリス共同体〉に於ては、一方で、「システム統合」の〈対自的〉遂行の必要が析出されながら、他方で、〈戦争〉の緊急性そのものが、民族の原生的〈神話〉(即ち〈伝統〉)を解体させずに、それどころか寧ろ、それを強化し、そのかぎり、「システム統合」と「社会統合」の二局面を分化させないまま、構成員達の間の紐帯を一層堅固にさせている。だが、〈戦争〉の緊急性が薄れ、古典期後半のアテーナイの〈民主制ポリス〉に於けるように、所謂〈帝国主義的〉支配を基礎にして、〈市民皆兵制〉に〈傭兵制〉が取って替わり、〈ポリス共同体〉の内部で土地の排他的〈私有〉と〈社会的分業〉が進展すれば、早晚、〈神話〉と〈伝統〉の解体が始まる。⁽¹¹⁾ここでは、上述したように、「理性」は「主観化」道具化し、〈評判と金銭〉(ドクサ・カイ・クレーマタ)が自己目的化し、このことにより人間の「魂」の秩序は転倒して、言わば〈普遍的イデオロギー状況〉が現出する。⁽¹²⁾かくて〈神話〉と〈伝統〉の内実が希薄化することになれば、たとえ、スパルテオータイに於けるように、政治的「システム統合」機能の強化によって、〈ポリス共同体〉の崩壊がさ

しあたりは防遏されたとしても、その構成員の生きる〈意味〉の喪失は不可避となり、原生的〈神話〉に代替する「社会統合」機能の創出の必要が生ずる。ここで問題に成り得ることは、この新たに「社会統合」機能を果たすべき当の何が単なる「イデオロギー」（単なる新たな〈神話〉）ではない、という保証はどこにあるのか、ということ以外ではないであろう。

プラトンの描き出す「浄化されたポリス」モデルの中核を成す「ヒュラクス」は、一面で、「第二次共同体」一般の存立に不可欠な「システム統合」機能を果たすばかりでなく、他面で、それよりも何よりも、〈即自的〉内実を喪失した原生的〈神話〉や〈伝統〉に替わり、その「社会統合」機能の再建を、言わば〈对自的に〉担うのである。伝統的〈神話〉に替わる何かが単なる「イデオロギー」でないという保証は、「ヒュラクス」の在り方如何に掛かっている。ここで言う「ヒュラクス」の〈对自的〉「社会統合」機能とは、換言すれば、一生涯に渡る〈ポリス共同体〉への献身、〈個〉の〈全体〉への全面的献身による〈個〉そのものの内実（アイデンティティ）の自覚的实现である。ここでは、「ヒュラクス」は基本的に〈戦士〉であり、徹頭徹尾選抜かれ鍛え抜かれた〈公〉人であるが、彼の〈ポリス共同体〉への献身生活は、単なる軍事専門家や単なるマンダリンなどのそれとは異なり、「魂」の生涯に渡る不断の陶冶と、生死を賭する「魂」の緊張とを伴っている。「ヒュラクス」は、上述したように、〈言語〉、〈伝統〉、〈市民権〉、就中生活の基盤であり主要な〈生産手段〉である〈大地〉を共有する〈ポリス共同体〉の構成員、即ち〈市民〉（ポリータイ）の中から、その〈徳〉と〈知〉の在り方に照らして厳しく選抜される。その選抜の基準は、生涯に渡り陶冶・練成され、見定められた〈ヒュシス〉（素質・能力）と言わば〈無私精神〉、〈ポリス共同体〉への全き献身の覚悟（気概）との有無であり、それ以外ではない。

「浄化されたポリス」に於ては、アテーナイ〈民主制ポリス〉に於てとは異なり、その構成員は、統治に参与する「ヒ

ユラクス」層と参与しない自余の層へと、〈制度〉的に明確に區別される。ここでの兩層間の〈制度的〉區別は、確かに、〈ヒュシス〉に基付いている。しかし、それは、上述したように、〈カースト制〉や封建的〈身分制〉とは、基本的に異なる。それは、以下で触れるように、〈制度〉上決して固定的ではなく、不断に吟味され見定められる〈素質〉とその陶冶の成果如何とに依じて、流動的・可逆的だからである。「ヒュラクス」層と自余の層との関係は又、確かに、現実に〈戦争〉が起こっていないかぎりでは、ある意味では、〈非生産者〉層と〈生産者〉層との関係、そう言いたければ、言わば〈精神労働〉と〈肉体労働〉との関係である。だがしかし、それは又、経済学的意味での、〈階級的〉支配関係とも、本質的に異なる。これも以下で触れるように、〈制度〉上前者に於ては、あらゆる排他的〈私有〉が原理的に否定され、後者に於ては、〈労働〉と〈所有〉とが分離せず、前者には最低限必要な〈生活資料〉のみが後者から供給されるとされている以上、前者の後者に対する、通常の意味での〈階級支配〉あるいは〈搾取〉は有り得ないからである。成程、確かに兩者の関係は又、〈統率〉、〈指揮〉、〈命令〉、〈勧告〉、〈禁止〉などのメッセイジの発信者とそれらの受信者との関係であるが、このメッセイジの後者による受信は、前者の〈強制力〉によるよりも、寧ろ後者の〈自発性〉によって成り立つ。この意味では、兩者間には、〈権力〉関係ではなく、〈権威〉関係が存すると言えよう。

さて、「ヒュラクス」層を中核とする「浄化されたポリス」モデルに於いて、〈制度〉上注目されるべきは、既述したところでは、次の点である。即ち、第一に、一方で、この「ポリス」は、「ヒュラクス」層と「生産者」層との二層から構成され、ここには厳然たる〈階層〉があるが、他方では、兩層いずれに属してしようと、成人は全て「ポリタイ」であり、彼等の子弟（パイデス）は、少なくとも「パイダイアー」を義務教育として受ける必要があること、第二に、第一のことが前提となつてはじめて可能となることであるが、兩層の間に、帰属に関して、資質や能力次第で、流動性・可逆性があり、然もその関係は「階級支配」関係ではないこと、第三に、「ヒュラクス」に成り得る〈資質〉を見定めら

れた者は、さらに上級の学科を修得し、生涯に渉って〈教育〉と様々な〈試練〉を受ける言わば〈使命〉Bestimmungを持つこと、である。

だが、プラトーンの描き出す、この「浄化されたポリス」モデルに於ける、諸〈制度〉のなかで、古来最も人々の耳目を聳動させてきたのは、なんとといっても、「ヒュラクス」層に対する、〈家族〉の解体と〈性〉差別の撤廃とを含む、ラディカルな〈共有制〉（〈私有〉の徹底した否定）であろう。⁽¹³⁾ここでは、この層に属す人々は、自分自身の〈身体〉と〈魂〉以外、如何なる〈もの〉（財物）も、妻子さえも、〈自分のもの〉（タ・イディア、Eigentum, Property）として、排他的に〈私有〉しない。否、彼等自身の〈身体〉や〈魂〉でさえ、或る意味では、彼等だけのものではない。彼等に於ては、基本的に、〈エゴ〉（Ich）と〈ヘーメイス〉（Weis）が一致し、相互間に〈排他性〉はあってはならないのである。彼等は、〈傭兵〉とは違い、〈労働者並みの賃金〉どころか、凡そ一切の貨幣（ノミスマ）を手にししない。彼等が「守護」（ヒュラケー）の任務の報酬として「生産者」層から受け取るのは、「節度ある勇敢な戦士（アウトウレーター）が必要とする分量」（416B⁽¹⁴⁾）の食糧（シーチオン）以外ではない。何故なら「彼等はその魂の中に、神々から与えられた神的な金銀を常に持っているのであるから、この上人間世界のそれを何ら必要としないし、それに、神的な金銀の所有を此の世の金銀の所有によって混ぜ汚すのは神意に悖る」からである。（416E～417A⁽¹⁵⁾）

ここで見誤ってはならないのは、次の諸点である。まず第一に、この〈私有〉の徹底的否定という〈制度〉は、この「ポリス」全体ではなく、それを構成する一部の層である「ヒュラクス」層にのみ適用される、という点である。そして、そうであるのは、「ヒュラクス」が、〈私有〉の否定を、何らかの外的な〈他者〉によってではなく、自ら内発的に為し得る少なくとも潜在的〈資質〉を備えているかぎりには於てである。この〈私有〉の否定が〈禁止〉ないし〈外的強制〉の意味を持つのは、この〈資質〉が尚現実化（顕在化）していないかぎりには於てである。第二に、〈私的所有〉の否

定は、端的に言つて、〈個体的所有〉のそれを意味しない、という点である。ここで否定されるのは、〈ポリリス的動物〉(ゾーイオン・ポリティコン)としての人間の〈在り方〉とその〈行為〉の、〈排他性〉(Privatheit, Abgeschlossenheit, Eigendunkelheit, Eigennützigkeit, Eitelkeit)、即ち〈イデオロギー〉(他者とのコミュニケーションを欠く私人性、狂気、無知、白痴等)であり、諸個人〈(Individuen)の〈個性〉(Individualität)ないし〈固有性〉(Eigentümlichkeit)ではない。後者は、否定されるどころか、〈内的強制〉により前者を否定することを通じて、まさに実現されなければならないのであり、このことこそが、プラトーンの提示している課題なのである。

「浄化されたポリリス」モデルに於ては、その中核を成す「ヒュラクス」層は、そして、この層に限つて、〈制度〉上、一方で直接的〈生産〉労働から解除され、他方で〈私有〉一般が否定されているが、ここでは、この層に於ける、これらの〈制度〉的両契機は、相互限定の関係にある。古来、往々にして見られるように、前者の契機をそれだけ取り出して、そこに、〈階級支配〉或るいは〈生産〉労働に対する侮蔑を、そして、後者の契機を同じくそれだけ取り出して、そこに〈ユートピア〉(共産主義)或るいは〈逆ユートピア〉(全体主義)を、〈直ちに〉見ようとするのは、皮相な見方であらう。何故ならば、この〈ポリリス・モデル(3)〉にあつては、勿論、「節度」を欠く者、財貨を自己目的として追求する者、つまり〈欲望の奴隷〉に対する侮蔑はあつても、だからといって、〈必要〉な〈生産〉労働そのものに対するそれがあるはずはないからである。そして又、⁽¹⁶⁾ここには、青年マルクスが〈野蛮な共産主義〉(der rohe und gedankenlose Kommunismus)と批判的に呼んだような、〈ポリリス〉全体が生み出した〈価値〉(〈福祉価値〉と〈名譽価値〉の総体)の、質的に〈無差別〉な、量的〈均等〉配分など、あるはずはないからである。プラトーンは、彼の「浄化されたポリリス」モデルに於て、〈制度〉上、一方で、その「ポリリス」の「システム統合」機能の二局面である、〈政治〉と〈経済〉とを、厳格に切断しておきながら、まさにこれを自覚的に行うことによつて、他方で、「社会統合」機能(文化)の自覚

的創出を通じて、諸個人や諸階層間に、〈疎外〉や〈搾取〉の關係が成立しないような形で、前者の二局面を有機的に再結合させることを、構想しているのである。

成程、この〈ポリス・モデル(3)〉に於ては、特に成立期の、歴史的現実としての、〈ポリス共同体〉に於てとは異なり、広義の〈労働〉が、〈生産〉と〈戦闘〉とに、質的に弁別され、それらの一方を専ら担う二層へと、振り分けられている。即ち、ここでは、確かに、人間の〈活動〉Tätigkeitが、カテゴリーとして、(例えば、アーレントやハーバーマスに於けるように) Arbeiten (labour)、Herstellen (work) と Handeln (Interaktion, action) とに弁別されているばかりでなく、この區別が、〈制度〉的に社会層のそれとして、指定されている。しかしながら、この〈制度〉の下では、この〈ポリス〉を構成する二つの社会層の關係が、「疎外」や「搾取」の關係ではなく、〈相互的〉(互酬的、レシプロカル) 關係であり、従つて、社会的総〈労働〉の分割(分業)が単に〈機能〉的それであり、この〈ポリス〉の〈社会統合〉が実質的であるかぎりで、ある意味では、直接的〈生産〉労働から解除されている「ヒュラクス」層も又、間接的には、それに関与していることになるであらう。逆に言えば、「生産者」層の、単なる〈欲望の奴隷〉ではない〈節度〉ある在り方も、彼等の狭義の〈労働〉も、「ヒュラクス」層と彼等の広義の〈労働〉(防衛・治安・教育)を前提として、これとの關係に於て、初めて可能となるのであらう。いずれにしても、ここでの〈社会的労働〉総体の〈分割〉は、近代世界の資本制的商品再生産システムに於けるように排他的・自己完結的諸個人が成り行き任せに盲目的に繰り広げるそれではなく、他者に対して開かれた諸個人の生得の潜在的能力を實現開花させるべく自覺的に為されるそれである。勿論、ここでも諸個人や諸社会層の間に、〈緊張〉關係或るいは〈競争〉關係があるであらうし、又なければならぬ。だが、それは、後者に於ては、前者に於けるように、〈ゼロ・サム〉的それではなく、〈非ゼロ・サム〉的それ(アゴニスマ)であり、真実なる自己開花のために相互に競い合う(アゴニスタイ)ような、それでなければならぬ

であろう。

要するに、ここには、人間や社会層（広義の〈労働〉機能）に関して、確かに、〈無差別〉はなく、厳然たる〈機能〉（能力）区分がある。両者の関係は、プラトーン言葉で言えば、「ソーターレス」（救済・保全する人々）、「エピクローイ」（援助する人々）と「ミストドタイ」（雇ってくれる人々）、「トロフェイス」（養ってくれる人々）との関係である。⁽¹⁸⁾ (463B)しかし、それは、とりわけ社会的〈剰余生産〉を可能にする〈生産力〉が獲得されて以来、人間社会に成立しているような、〈身分〉や〈階級〉の差別ではない。両者の間には、〈敵対的〉依存関係ではなく、言わば〈有機的〉依存関係があるのである。この「浄化されたポリス」モデルに於ては、「ヒュラクス」層のみならず、「他のポリータイをも又、その一人一人を、それぞれが生まれつき適している一つずつの仕事（エルゴン）に就けるべきであつて、そうすることにより、ポリータイの一人一人が自分に与えられた一つの仕事を果たして、決して多くの人間に分裂することなく真に一人の人間になるように、ひいてはそのようにして、ポリスの全体も自然に一つのポリスとなつて、決して多くのポリスに分裂することのないようにしなければならない」⁽¹⁹⁾ (433D)のである。だが、このことが言い得るのは、勿論、次の様な前提条件が、〈制度〉上、充たされているかぎりには於てである。

即ち、それは、第一に、この〈ポリス〉を構成する全ての〈ポリータイ〉が、〈共同性〉を、即ち〈個体的アイデンティティ〉を自己形成せしめ得る〈集合的アイデンティティ〉（die kollektive Identität, wodurch die Ich-Identität ausgebildet werden kann）を共有すること（従つて、これと関連して、少なくとも「パイディアー」は、全ての〈ポリータイ〉の子弟が、義務教育として受けること）である。

第二に、この〈ポリス〉を構成する両層間に、〈制度〉的に、〈相互性〉（互酬性）と〈可逆性〉（流動性）があることである。即ち、「もし守護者達に凡庸な子供が生まれたならば、これを他の人々の中へ送り出し、他の人々に優れた子供

が生まれたならば、守護者達の中へ入れなければならない」(423CD)⁽²⁰⁾ということである。

第三に、この「ポリス」の内部に於て、一方に「贅沢と怠惰」を、他方に「卑しさと劣悪」を生む、「富裕と貧困」の二極分化が起こらないような、全体的視野からの制御がなされることである。(421D~422A)⁽²¹⁾そして、「ポリスが小さくもならず、見かけだけ大きなポリスとなることもなく、充分であり、且つ一つであるようにと、あらゆる手段を尽くして見張らなければならない」(423C)⁽²²⁾ということである。

そして最後に、この「浄化されたポリス」モデルに於て、その中核的位置を占め、「戦闘」の他に、以上のような諸「制度」を実現させるための任務を實際に担うべき「ヒュラクス」層の人々が、「魂」に於て「より優れている」こと(アメイノーン・エイナイ)、即ち彼等が「より自律的な」自己制御能力を持っていること、そして彼等が「ポリス」全体に全生涯を通じて全面的に献身すること、そして、このことが、決して見かけや形式の上ではなく、実質的に且つ現実的に、そうであることである。

この最後の点を可能にさせるのが、一方での、全生涯に渉る「教育」(自己陶冶)と不断の「試練」、他方での、「私有」の否定(「家族」の解体)という、二つの「制度」である。これらは、いずれも、「ヒュラクス」層に限って適用される。これらの「制度」が「ヒュラクス」層に限定されるのには理由がある。

第一に、前者(生涯教育制度)に関して言えば、「ヒュラクス」層は、何と言っても、その存立の成否が、この「ポリス・モデル」(3)のそれを決める基軸を成すところの当のこと(worum sich alles dreht; wovon alles abhängt)だからである。即ち、「ポリスとその諸々の法律を守護する(ヒュラッティン)任にある者達が、もはや守護者(ヒュラクス)であることをやめて、ただそう見せかけているに過ぎないのであれば、(…)ポリス全体を根底から滅ぼすことになるのであり、逆にポリスの善き統治と幸福を齎す決め手も又、ただ彼等だけが持っているのである」からである。

(421A)⁽²³⁾

第二に、後者（〈私有〉の否定という制度）に関して言えば、「ヒュラクス」層の中の「エピクローイ」（補助者達）或るいは「ボエートイ」（援助者達）の、「魂」の浄化（自律的自己制御能力の形成）は、決して完成してはいないからである。まさにそれ故に、まさにそのかぎりで、彼等は尚、そうした〈制度〉と、「アルコーン」たる真正な「フィロソフオス」による精神的後見（指導・勧告・命令）とを、必要としているのである。「ヒュラクス」層に対する、この〈共有制〉を、プラトーンは、彼が〈アウトピスト〉であるが故に設定しているのではなく、それどころか寧ろ逆に、彼が冷徹なヘリアリストであるが故にそうしているのである。

確かに、プラトーンの描き出す〈ポリス〉モデルに於ける、これらの〈制度〉の下での彼等の生活は、ひたすら〈祈り且つ働く〉閉鎖的〈修道院〉のそのような、禁欲的イメージを抱かせる。だが、「ヒュラクス」層（エピクローイ）の生活は、自給自足の〈修道院〉に於けるそれとは異なり、〈ポリス〉全体から隔絶された、閉鎖的それではない。それは、〈ポリス〉全体の中で有機的に位置付けられているからである。そして、ここでは単なる盲目的〈禁欲主義〉も問題にならない。〈禁欲〉は自己目的ではなく、「魂」の浄化のための手段に過ぎないからである。

こうしたモデルを叙述するプラトーンは、〈倫理・道徳〉的立場に関して、決して単なる〈Rigori〉でも、況んや〈Hedonist〉でもないであろう。強いて言えば、彼は、彼の言う意味で、〈Eudaimonist〉である。彼にとって問題は、単なる〈禁欲〉というよりも、〈欲求〉の適切な自律的〈自己制御〉によって、人間が、各人にそれぞれ与えられた〈資質〉に適った形で、充全なる自己実現を果たすことである。プラトーンに従えば、人間にとって、「幸福（仕合わせ）」（エウダイモニア）は、〈欲望〉の無差別な全き充足にあるのでも、その無差別な全き否定にあるのでもなく、「単純にして適正な欲望、〈知性〉（ヌース）と〈正しい思惑〉（ドクサ・オルテー）に助けられ、思惟（ロギスモス）によって導

かれる欲望」(431C)⁽²⁴⁾を自らのものとする点にあるのである。とすれば、〈不必要な欲望〉に追い回されている者は「幸福(仕合わせ)」には最も遠いのであり、苛酷な心身の鍛練を課され、一見人間の本性に反しているように見える件の〈制度〉の下に生活する「ヒュラクス」は、内なる「魂」に於て〈そのより優れた部分〉(知恵)によって〈より劣った部分〉(欲望)がより制御されているかぎり、より「幸福(仕合わせ)」である、とも言えよう。だが、プラトーンにとって、問題は、いずれがより「幸福(仕合わせ)」かということ自体ではない。この点に関して、彼はソークラテースをして次の様に語らしめている。「しかしながら、我々が(浄化された)ポリスを建設するにあたって目標としているのは、そのことではない。つまり、そのなかにある一つの階層だけが特別に幸福になるように、ということではなく、ポリスの全体ができるだけ幸福になるように、ということなのだ。というのは、我々はそのようなポリスの中にこそ、最もよく〈正義〉を見出すことができるだろうし、逆に最も悪く治められているポリスの中にこそ、〈不正〉を見出すことができるだろう」(420B)⁽²⁵⁾からである。「ポリスの全体が成長してよく治められている状態のもとでこそ、それぞれの階層をして、自然本来的にそれぞれに与えられる幸福に、与かるようにさせるべきである。」(421C)⁽²⁶⁾要するに、プラトーンに於ては、全体から切り離された自己完結的個人でもなく、又全体の中に全く埋没しきった個人でもなく、全体の中で適格に位置付けられ、そのことにより、内発的に自己の〈資質〉を充分に開花させる個人こそが「エウダイモニア」なのである。

さて、以上のように、プラトーンの構想に従って描き出された「浄化されたポリス」、即ち「ポリス・モデル」(3)〈は、「言葉の上で」(ロゴイ)作成された「優れたポリスの範型」(パライクマ・アガテース・ポレオース)(472E)⁽²⁷⁾であるが、これは、「いやしくも、それが正しい仕方では建設されたとすれば、完全な意味に於て、優れたポリスであるはず」である。「とすれば明らかに、このポリスは、知恵があり(ソフェー)、勇気があり(アンドレイアー)、節制を保ち

(ソフローン)、正義を備えている(ディカイアー)ことになる」(427E)⁽²⁸⁾はずである。人口に膾炙した、かの「知恵」、「勇氣」、「節制」そして「正義」は、第四卷六節―十節に於て、このように、先ず「浄化されたポリス」が備えているはずである四つの「アレター」として、議論される。

第一に、「知恵」(ソフィアー)とは、ここでは、「ポリスに於ける一部の特定の事柄のためでなく、全体としてのポリス自身のために、どのようにすれば自国内の問題に就いても他国との関係に於ても、最も善く対処できるかを考慮する(ブーレウエイン) ような知識(エピステーメー)」、即ち「全き守護者達」(テレオイ・ヒュラケス)と呼ばれる「統治者達」(アルコンテス)(つまり「フィロソフォイ」)の内にある「ポリスを守護するための知識」(ヒュラキケー)である。(428D)⁽²⁹⁾「浄化されたポリス」は、「自らの最も小さな階層と部分に他ならない指導者達・統治者達(プロエストーテス・アルコンテス)によってこそ、全体として〈知恵〉がある、ということになり、そして、本来(ヒュセイ)最も少数しか生じないこの種族(ゲノス)こそは、他の諸々の知識の中でそれだけが〈知恵〉と呼ばれてしかるべき知識に、与かることができる」のである。(428E~429A)⁽³⁰⁾ここでは、「知恵」は、生涯に渉る「魂」の厳格な陶冶によって「素質」を開花させる、文字通りの選び抜かれた者達(エリート)の中からさらに選び抜かれた者達のみが担い得る特別な「知識」である、ということが示唆されている。

第二に、「勇氣」(アンドレイアー)とは、「恐ろしいもの(タ・デイナ)とは何であり如何なるものであるかということに就いて、それを立法者(ノモテテース)が教育(パイダイアー)に於て告げ聞かせたとおりのものと見做す考え(ドクサー)を、あらゆる場合を通じて、保持し続ける(ソイゼイン) ような力を持っている」ことである。(429B~429C)⁽³¹⁾即ち、それを「苦痛の内であっても、快楽の内であっても、欲望の内であっても、恐怖の内であっても、それを守り抜いて(ディアソーゼスタイ)、投げ出さないとすること」(429C~D)⁽³²⁾である。「タ・デイナ」に就いての「真摯な(真直

な)、ノモスに適う、意見を保持すること」(ソーターリアー・ドクセース・オルテース・テ・カイ・ノミム) (430B)⁽³³⁾としての、ポリスの基準での「勇氣」(アンドレイアー・ポリテイケー)を担うのは、言うまでもなく、かの「エピクローイ」(補助者)或るいは「ポエートイ」(援助者)と呼ばれた中堅の「ヒュラケス」である。

第三に、「節制」(ソーフロシュネー)とは、個人に於てもポリスに於ても、一般に、「素質」に於て「優れたもの」の「劣るもの」に対する制御(エンクラテイア)、そして両者の間に、まさにその点(どちらが「アルケイン」すべきかという点)に関して成立する、言わば「クシユンフォーニア」(交響音)である。それは、個人に於ては、「魂」の「劣る部分」即ち「欲望」(エピテューミアー)が、「優れた部分」即ち「知性」(ヌース)、「真摯な意見」(ドクサ・オルテ)に従い、「思惟」(ロギスモス)によって導かれ、「単純で適正」(ハプレー・テ・カイ・メトリエー)な状態にあることである。(431C)⁽³⁴⁾同様に、それは、ポリスに於ては、「より優れた者」(より優れた「素質」をより優れた「教育」によって開花させているもの)が、「より劣る者」を、制御(統治)していること、そして両者の間に、このことに就いて同一の意見(ドクサー)が成立していることである。「それはポリスの全体に、文字通り絃の全音域に行き渡るように行き渡っていて、最も弱い人々にも最も強い人々にも、又その中間の人々にも、完全調和の音階のもとに同一の歌を歌わせるようにするものである。」(432A)⁽³⁵⁾個人の「魂」に於ける「節制」の成立は、一般的に言うならば、必ずしもポリスに於けるそれを前提とはしないであろう。しかし、完全な「ハルモニアー」の状態にある「範型」(パラダイクマ)としての「浄化されたポリス」に於ては、両者に於ける「節制」の在り方は、相互に規定し合っていることになるであろう。いずれにしても、ここで言われているような意味での、ポリスに於ける「節制」の成立は、「より劣る者」の側からの、言わば「対自的」な「自発的服従」があり得るか否かに掛かっていると見えよう。

最後に、「正義」(ディカイオシュネー)とは、「浄化されたポリス」モデルを成立せしめる不可欠の条件として設定さ

れている当の事柄、即ち「各人はポリスに於ける様々な仕事の内で、その人の生まれつき（ヒュシス）が本来それに最も適しているような（エピテーデイオタター・ペピュキユーイア）仕事を、一人が一つずつ行わなければならないという事、そして、自分のことだけをして余計なことに手出しをしないこと（ト・タ・ハウトゥ・プラッティン・カイ・メー・ポリュプラーンモネイン）」（433A³⁶）である。この「正義」こそは、「節制」、「勇氣」、「知恵」という「浄化されたポリス」が備える「アレター」の「全てに力を与えてポリスの内に生じさせ、そして一端生じた後には、それらのへアレター」を―それらが内在するかぎり―存続させるはたらきをするものに他ならない。」（433B³⁷）

「浄化されたポリス」モデルが備えている、これらの四つの「アレター」は、プラトーンの語らしめるソークラテースに従えば、かのへ小文字（グランマタ・スミークラ）のポリスたる「魂」（フシユケー）の備える「アレター」と類比され（アナロギスタイ）得る。何故なら、人間の「魂」は、人間がまさにそれによって生き行為するところの当のものであるが、それには、それを構成し、機能的に三つに区別し得る部分、即ち、第一に、行為に駆り立て、それに動機付けを与える「欲望的部分」（エピトゥーメーティコン）、第二に、それを制御する「理知的部分」（ロギスティコン）、そして、第三に、両者の間に、後者に聴従し、後者ために戦う「氣概的部分」（トゥーモエイデス）があり、これらの機能は、かの「浄化されたポリス」を構成する三階層（生産者、フィロソフォス、エピクローイ）の三機能、即ち、「クレーマティスティコン」（生活資料の生産、金儲け）、「ブルーウティコン」（政策審議、政策決定）、「エピクローレティコン」（統治者への補助、防衛、治安、行政、教育監督）（411A³⁸）に、類比され得るからである。

「自分の内なるそれぞれのものにそれ自身の仕事でないことを許さず、魂の中にある種族に互いに余計な手出しをすることも許さないで、真に自分に固有の事を整え、自分で自分を制御し、秩序付け、自分自身と親しい友となり、三つあるそれらの部分を、言わばちょうど音階の調和を形作る高音・低音・中音の三つの音のように調和させ、さ

らに、もしそれらの間に別の何か中間的なものがあれば、その全てを結び合わせ、多くのものであることを止めて、節制と調和を堅持した、完全な意味での、一人の人間になりきって、かくてその上で、もし何かする必要があれば、はじめて行為に出るといふことになるのだ。」(443D)⁽³⁹⁾

「範型」としての「浄化されたポリス」モデルに類比される、人間の「魂」の、このような「クシユンフォーニアー」(交響楽)は、まさしくかのピユータゴレイオイの所謂「天球のハルモニア」を想起させるが、プラトンは、この「魂」の内なる「動的秩序」を、その「魂」そのものの「アレテー」としての「正義」と呼び、この「交響楽」の指揮監督者である「魂」の「理知的部分」の「アレテー」を、「知恵」(ソフィアー)と呼んでいるのである。

(4) 正義の根拠付け(哲人王論、イデア論)

「正義」に関するプラトンの議論の根底には、言わば同心円としての、人間(魂)・ポリス・宇宙を貫く、内在的「理性秩序」(コスモス)に就いてのイメージがある。「正義とは何か」という問い掛けとそれに対する回答は、プラトーンに於ては、このイメージに規定されている。人間という存在は、「理性」(ヌース、ロゴス)と一般に呼ばれる「秩序」形成能力を、少なくとも潜在的に(即自的に)、備えており、この潜在的能力は、ポリス(社会)に於ける、それを構成する諸個人の生活活動を通じて、自己実現(対自化)される。これは、生存を全うするための「相互依存」関係ばかりでなく、「社会化」(諸個人による所与の社会的諸規範の内面化)による「アイデンティティ形成」もまた、人間存在にとって、その自然本性(ヒュシス)からして、必然的であることを、意味している。人間存在は、宇宙(自然)「秩序」(コスモス)の内に存在するが、そこに全く埋没し切っている訳ではない。それは、よかれあしかれ、同時にそこから「逸脱」或るいは「超越」する契機を、本来的に備えている。人間は、単なる動物でも神でもない以上、ポリス(社会)に

於ける生活活動を通じて、言わば第二の〔魂〕と「ポリス」に於ける〕〈秩序〉を〈形成すること〉によってのみ、存在し得る存在である。この意味で、人間は「ゾーイオン・ポリティコン」である。これを〈類〉（ポリス）の〈個〉（魂）に対する先在性を前提とする議論として解することは的外れであろう。両契機（全体と個体）のいずれが先在するかの二者択一は、ここでは問題とならないからである。強いて言えば、ここでは、寧ろ両契機の〈関係〉そのものが第一義的であり、問題はこの〈関係〉そのものの在り方なのである。

「ゾーイオン・ポリティコン」としての人間が「それによって生きるところの当のもの」である「魂」の機能は、プラトーンに従えば、三つに区別される。その中で、「欲求」は、生物一般が共有する、生存に必要な行為を起動する機能であり、これは、人間以外の生物〈種〉の場合、言わば閉じられた内在的自動制御メカニズムによって枠付けられている。人間という生物〈種〉に於ては、このメカニズムが言わば欠損しており、従って、よかれあしかれ、その再生産システムの在り方は相対的に開放されている。或る意味では、この欠損を補完して、その「欲求」を制御する、人間に固有の機能こそが、「理性」なのである。この「理性」は、一方で「魂」の潜在的〈秩序〉形成能力であるとともに、他方で「ポリス」の〈秩序〉そのものでもある。後者は前者により形成されるが、翻って、前者は後者の内面化を通じてのみ顕在化され得るからである。それ故に又、プラトーンの議論に於ては、「ポリス」の構造（三機能区分と諸機能間の制御関係）と「ポリス」を構成する人間諸個人の「魂」のそれとの間には、緊密な〈類比関係〉（アナログイヤー）ばかりでなく、相互〈制約関係〉もまた、存在することになるのである。その際、両契機を繋ぐ連結環こそ、「ゾーイオン・ポリティコン」としての人間存在が備える、「理性」なのである。そのかぎりでは、人間の「魂」は言わば「小文字のポリス」であり、逆に、それらから成る「ポリス」は「大文字の魂」である。

プラトーンに於ては、このように、人間の「魂」と「ポリス」との間のこの構造的照応関係が前提とされ、両者それ

それに於ける、件の三機能区分と三層構造に就いての議論が展開されるが、これらの議論は、勿論、方法的に任意の仮説として、或るいは説明の便宜のための「類比」(アナロジー)として設定されるのであるが、或る(強いて言えば存在論的)意味では、人間存在の「ゾーイオン・ポリティコン」という在り方そのものから、寧ろ必然的にそのような形で展開される、とも言えるであろう。その際、問われるべき「正義」とは、プラトーンに於ては、端的に言つて、かの全宇宙を貫く内在的(理性秩序)に照応(響応)する(ヒュシスに適う)、人間の「魂」と「ポリス」に於ける、在るべき秩序そのものに他ならない。

だが、プラトーン固有の問題は、実のところ、「正義とは何か」ということよりも、寧ろ、へいつもすでに在るところの「正義」を、人間存在をして自己へ発見せしめること(Heuristik)である。この意味での「正義」を、一体如何なる能力の、如何なる者が、如何なる方法に於て、そのものとして、見定めるのか。そして、一体何が、彼のこの見定めるといふ行為そのことと、これによって見定められたことそのこととを、究極に於て、根拠付けるのか。プラトーンの答えはこうである。「正義」をまさにそれとして見定めるのは、その「素質」を「浄化されたポリス」(ポリス・モデル(3))に於ける適切な「教育」で開花させた真実の「フィロソフォス」(哲学者)であり、彼はこれを、その「ノエシス」(弁証法的理性)により、「ディアレクティケー」(哲学的問答法)という方法に於て、果たすのである。そして、かの「太陽の比喻」で極めて意味深く語られているように、この哲学的営為とその対象との根拠と原因を成すはずの当のものをこそ、「善のアイデア」(ヘー・トゥー・アガトゥー・イデア)である。即ち、これこそが、プラトーンにとって、かの同心円としての「魂・ポリス・宇宙」を貫通する、内在的(理性秩序)を成立せしめる根拠であり原因なのである。

プラトーンの立場は、よかれあしかれ、直截に言つて、「イデア」実在論である。従つて、この立場からすれば、件の

「浄化されたポリス」モデルは非現実的である、或るいはそれは実現不可能である、という批判は、意味をなさない。このモデルを彼が描き出した目的は、それが「現実存在し得ることを証明することではなかった」(427D)⁽¹⁾のである。事実、それは、或る意味では、全く非現実的であり実現不可能である。「ロゴスで語られるとおりの事柄が、そのまま行為のうちに実現される」(473A)⁽²⁾ということはあり得ないからである。だが、プラトーンの立場からすれば、「寧ろ、実践はロゴスよりも真理に触れることが少ないというのが、本来の在り方」(同)⁽³⁾である。それ故にこそ、その「ロゴス」に於て作成された件のモデルは、「範型」(パラダイクマ)としての意味を持ち得るのである。従って、このモデルの実現可能性に関して言えば、その完全な可能性を示すことではなく、「どのようにすればポリスが、我々の記述にできるだけ近い仕方であらわれ得るかを発見」(同)⁽⁴⁾するに過ぎない問題になり得るのである。ここで、プラトーンは端的に問うている。「あるポリスがそのようなポリリーテイアー(「浄化されたポリス」体制)へと移行することを可能ならしめるような、最小限の変革は何か」(473B)⁽⁵⁾と。そして、彼は、ソークラテースをして、自ら「最大の浪」(キューマ)つまり「常識外れの言説」(パラドクサー)に喩えるかの回答(所謂「哲人王論」)を呈示せしめる。

「哲学者達(フィロソフォイ)が、ポリスに於て、王となって統治する(バシレウエイン)のでないかぎり、或るいは、現在王(バシレイス)と呼ばれ、権力者(デュナスタイ)と呼ばれている人達が、真実に且つ充分に(グネーシオース・カイ・ヒカノース)哲学する(フィロソフエイン)のでないかぎり、即ち、政治的権力(デュナミス・ポリリーケー)と哲学的精神(フィロソフィアー)が一体化されて、多くの人々の素質(ヒュセイス)が、現在のようにこの二つの方向へ別々に進むのを強制的に(エクス・アナソケース)禁止されるのでないかぎり、親愛なるグラウコーンよ、ポリスにとって不幸のやむとき(カコーン・パウラ)はないし、また人類にとっても同様だと思われる。さらに、我々が論述してきたようなポリリーテイアー(「浄化されたポリス」の在り方)にしても、このことが果たされないうちは、可

能なかり実現されて日の光を見るといふことは、決してないだろう。(…) 実際、ポリリーテイアーとしては、こうする以外には、個人生活に於ても(イディアアイ) 公共生活に於ても(デーモシアアイ)、幸福を齎す途(ティス・エウダイモネーセイエン) は在り得ない(…)。(473DE)⁽⁹⁾

このプラトーンの「政治権力と哲学的精神の結合」という基本テーゼを、「パラ・ドクソ・ロギアー」として受け取り、嘲笑(哄笑)と侮蔑(不評判)で(ゲローティ・カイ・アドクシアアイ) 押し流してしまふのは、二千数百年前のアテーナイに於ける(大衆)や(ソフィスタイ)ばかりではないであろう。この嘲笑と侮蔑に理由がない訳ではない。実際、「神話」に於てはいさ知らず、現在に至るまでの、人類の「階級社会」の、現実の歴史に於て、単なる(ヘウトピア)や(ヘイデオロギー)としてでなく、「政治」が「哲学」と現実に(結合)した例を、我々は知らない。それ故、如何なる時代にあつても、多少でも「対自化」した自己意識には、この(結合)は胡散臭いものと映らざるを得ない。又、就中、所謂(近代)的意識にとつて、それは(前近代)的意識の残滓を示すもの以外ではないであろう。“quid facti”(事実問題)と“quid iuris”(権利問題)との範疇的峻別こそが(近代)的意識のメルクマールだからである。だが、現代の(大衆)と(ソフィスタイ)の意識(没價值的客観化科学を標榜する所謂科学主義的意識)にとつて、それはもはや嘲笑と侮蔑の対象にすらならない。ここでは、「政治」は、一方で権力ゲームための操作技術へ、他方で福祉給付のための行政的処理の操作技術へ還元され、「哲学」は徹底的に解体されて、実証主義科学或いはディレクタント的知的パスルに姿を替えているから、プラトーンの言う意味での、真実なる「政治」にも、真実なる「哲学」にも、沉んや両者の関係にも、関心そのものが消え果てているからである。

だが、如何なる時代にあつても、プラトーンに従つて言えば、互いに(迎合)し合う、(大衆)と(ソフィスタイ)(イデオログ)とは、真実の「政治」(ポリテイケー)と真実の「哲学」(フィロソフィアー)に對して、ある意味で、(無

知〕であらざるを得ない。彼等（我々）の「魂」の「アレター」としての〔知〕の在り方に限界があるばかりでなく、彼等（我々）の「魂」の構成秩序に錯乱があるかぎり、彼等（我々）は、事柄の〔真実〕を、見定めることができないし、見定めようともしないからである。〔大衆〕の〔知〕は所与の「ドクサー」（憶断）を越えようとはしないし、ヘソフィスタイ〕の〔知〕の方は「ドクサー」の解体状況を越えようとはしない。後者の〔知〕も、一切の「ドクサー」を破壊しながら、「ドクサー」を越える真実なる〔知〕などというものは虚妄なる「ドクサー」以外ではない、という「ドクサー」からだけは、抜け出そうとはしないのである。ここでは、一切が虚妄であるという判断そのものが虚妄とならざるを得ない、というヘソフィマンズの矛盾〕の空虚な演劇が演じられるだけである。一切を否定し空虚とすること、まさにこのことによつて、それを遂行する当のものが否定され空虚にされる。ヘソフィスタイ〕の懷疑は、それがヘーゲルの言う意味で「抽象的否定」に過ぎないかぎり、自己破壊という形以外では完結しない。このような自己完結の形を採らないかぎり、そこに残る選択肢は、所与の現実に自己欺瞞的に〔適応〕すること以外にない。

だが、プラトーンの言うような本物の「政治」と本物の「哲学」とが〔生存〕そのものを脅かすような危険を孕んでいることを、〔大衆〕とヘソフィスタイ〕は、暗黙のうちに感じ取つてもいる。この意味では、彼等（我々）に欠けているのは、真実の「知識」ばかりではなく、真実の「勇氣」でもある。この意味での〔無知〕と〔怯懦〕を共有するかぎり、両者は迎合し合う。〔大衆〕は所与の現実（ポリス・社会）に対してラディカルな〔懷疑〕を決して向けない。勿論、彼等（我々）に〔懷疑〕がない訳ではない。ただ、彼等（我々）は、それを決して徹底しようとはしないのである。逆に、ヘソフィスタイ〕は一切の所与に〔懷疑〕を向ける。だが、この〔懷疑〕のベクトルは自己自身へと反転する。この〔懷疑〕は、上述したように、「抽象的否定」である以上、この反転によつて、まさに所与の現実（ポリス・社会）の全面的否定という自らの行為そのものを通じて、自己自身の全面的否定に行き着く。さらに、これは、文字通りの自己

破壊か、或るいは一転して所与の現実（ポリス・社会）の全面的肯定かの、いずれかに帰着する。かくて、本意であれ不本意であれ、状況の変化如何にかかわらず、現状を追認し、それへの〈適応〉によって〈生存〉（自己保存）を全うするということを第一義とする、という一点に於て、〈大衆〉の生き方とヘソフィスタイのそれとは一致する。

プラトーンが目の当たりしているアテーナイ世界のように、伝統的規範秩序が崩壊し、人間の「魂」の構成秩序が転倒してしまふところでは、まさにかの〈自己保存〉が自己目的化することにより、人間は〈生きる意味〉そのものを喪失する。このような〈価値の転倒〉した世界に於て、〈大衆〉は「最大のソフィスタース」である。〈大衆〉の盲目的〈欲望〉が、ここではポリスを支配し、教育するからである。排他的〈欲望〉が鎬を削り合うこの世界では、とどのつまりは、疎遠な他者の〈欲望〉を凌ごうとする〈道具的・操作的知〉の効用・効率・効果だけが問題に成り得る。プラトーンの言う意味での「ソフィスタイ」は、如何なる時代にあつても、〈大衆〉という「巨大な動物のドクサー」に迎合するのである。⁽⁸⁾ ソークラテースは、この〈大衆〉とヘソフィスタイとが共有する〈ドクサー〉を破壊する。そればかりではない。彼はへただだ生きる〈こと〉に対して〈善く生きる〉ことに高い優先順位を置くことで、〈価値の転倒〉の転倒を要求する。さなきだに、「魂の浄化（世話）」を語るソークラテースは、〈大衆〉とヘソフィスタイにとつて、〈異界の人〉である。単なる無自覚な〈大衆〉にとつては、ソークラテースは、単なる愚者か単なる現存秩序の破壊者である。だが、ヘソフィスタースとしての大衆にとつては、彼等が〈価値の転倒〉を自覚しながら、しかも、その再転倒への勇氣を持つとうとしない程度に應じて、ソークラテースは、単なる愚者としての嘲笑と侮蔑の対象から、畏怖あるいは敵意（ディアボレー）の対象となる。⁽⁹⁾

だが、プラトーンの言う真実なる「フィロソフォス」とは、そもそも何者なのか。そして彼に固有の〈知〉は如何なる在り方をしているのか。初期の対話篇以来、プラトーンがこれを問うとき、その念頭に常にソークラテースという人

物のイメージが在り続ける。勿論、一般に、同じ用語でも、それが使われる時期や文脈によって、そこに込められる意味内容は異なる。プラトーンに於ける「フィロソフォス」という用語も例外ではない。ここでは、以下に述べるような意味での、この用語の概念的差異に、特に注意を払っておきたい。言うまでもなく、プラトーンに於ては、「フィロソフォス」は単なる学問知識の探求者や教養・識見を持つ人を意味しない。まず第一に、これは初期對話篇で描かれたソクラテースという人物のイメージから直接帰結することであるが、ここでは、「フィロソフォス」は、寧ろ「ソフィアー」を欠く者であり、この欠如の自覚故に、激しく「ソフィアー」を希求する者である。彼の〈知〉は、単なる〈知〉にとどまらず、〈知〉そのものの根拠に向かっている。しかし、彼はその根拠が何であるかを言明できない。と言うより寧ろ、彼は「無知の知」という言明に自覚的に踏み留まるのである。⁽¹⁰⁾従つて、ここでは、ヘソフィアーからの隔絶とヘソフィアーへの憧憬との厳しい相克こそ、「フィロソフォス」を特徴付ける当のものなのである。第二に、これに対して、プラトーンの生涯の中期に成立したと目されるこの『ポリテイアー』（国家篇）という作品に於ては、「ソフィアー」（〈知〉そのものの根拠）を渴望する者としてではなく、それを「イデア」として観照する（テオーレイン）する能力をすでに持つ者としての「フィロソフォス」像が、呈示されている。プラトーンは、この意味での「フィロソフォス」が現実には全く在り得ない空虚な觀念に過ぎないとは決して考えていない。しかし、ここでの「フィロソフォス」像は、現実の「ポリス」に於けるそれではなく、あくまでも、件の「範型」（パラダイクマ）としての「浄化されたポリス」モデルに於て位置付けられた、同じく「範型」としてのそれなのである。プラトーンに於ける、以上の二つの「フィロソフォス」概念の区別を的確に押さえておかないと、無用な誤解や的外れの解釈は免れ難いであろう。

さて、「フィロソフォス」の〈知〉の在り方は、一般に、現実の「ポリス」に於ける、〈権力者〉、〈大衆〉、ヘソフィースタイのうちのいずれのそれとも、本質的に異なっている。又、「浄化されたポリス」モデルに於て「統治者」（アルコ

ーン、キューベルナオーン)として位置付けられる「フィロソフオイ」の〈知〉の在り方は、「生産者」層のそれとは勿論、「ヒュラクス」層一般(エピクロイ、ポエータイ)のそれとも、本質的に異なっている。この「浄化されたポリス」モデルに於ては、上述したように、「パイデアー」を適切に受けた者は全て、「より善きもの」とそうでないものとを判別する能力(即ち「真実のドクサー」を保持する能力、ドグマ、ピステイス)を形成している。但し、この場合、この判断そのものは自覚的(対自的)に為されるのではなく、寧ろ無意識のうちに「エートス」として身に付けたものである。彼等の憶断(ドクサー)が真実である(正しい)のは、「パイデアー」による「善きエートス」の形成と、この「パイデアー」を監督指導する真実なる「フィロソフオイ」を前提にするかぎりに於てである。今や、「在るもの」(オン)と「在らぬもの」(メー・オン)の〈中間的なもの〉に相関する、相対性を免れない「ドクサー」ではなく、端的に「在るもの」そのものに相関する、両者を区別する(ディアノエイン)ことのできる〈知〉(グノーシス、ノエシス)の形成、即ち「フィロソフオス」教育が問題となる。

「浄化されたポリス」モデルに於ける、この意味での「フィロソフオス」教育は、「より長い迂回路」を辿って、「全ての魂がそれを追求し、そのためにこそあらゆる行為が為されるところの当のもの」⁽¹¹⁾である「善のアイデア」を目指す、「最大の学問探求」(タ・メギスタ・マテーマタ)⁽¹²⁾である。周知のように、プラトンは、かの「線分(トゥメーマ、トゥメーマタ)の比喻」で、人間の認識能力(魂)の在り方とその段階を説明することにより、その最高段階としての、「善のアイデア」を観照し得る真実の「フィロソフオス」に固有の、〈知〉のメルクマールを呈示する。⁽¹³⁾そこでは、まず、人間の認識のはたらきとそれに相関するその対象のありかたが、〈見ること(ホラーン)〉(感覚・知覚すること)、〈見られるもの(ホラートン)〉(可視界)(即ち「憶断されるもの」(ト・ドクサストン))と、〈思惟すること(ノエイン)〉、〈思惟によって知られるもの(ノエートン)〉(可知界)とに、二分される。次に、この両者の比に従って、それそ

れがまた二分され、認識のはたらきは、その対象と同じく、前者は「明確性」(サフエーネイア)の度合い、後者は「眞実性」(アレーテイア)の度合いに応じて、その在り方が、四分される。認識の働きに関しては、それが「サフエーネイア」の度合いの低い方から高い方へと順に、(4)「エイカシア(影像知覚)」「間接的知覚」、(3)「ピステイス(確信)」「直接的知覚」、(2)「ディアノイア(分析的思考)」「間接知」、(1)「ノエーシス」(直接知) 或るいは「エピステーメー」と呼ばれている。(51IDE, 533D~534A)⁽¹⁴⁾(4)、(3)は又「ドクサー」(憶断・憶見)と呼ばれ、ともに「生成」(ゲネシス)と消滅(感覚・知覚の相対性)に係わり、(4)は「エイコス(似像)」「ホモイオーテン」に、(3)はその「原物」(ト・ホーイ・ホーモイオーター)に相関する。(2)と(1)とはともに「ノエーシス」とも呼ばれ、「実在」(ウーシアー)に係わる。

その際、プラトーンの議論に従えば、(2)「ディアノイアー(分析的思考)」「間接知」は、「似像」を用いながら、仮説(ヒュポテシス)から出発して、始原(アルケー)に遡るのではなく結末(テレウター)へと整合的に(ホモログ्रीメノース)に到達する。これに対して、(1)「ノエーシス(弁証法的理性)」「直接知」或るいは「エピステーメー」は、「ロゴスがそれ自身で、ディアロゴスの力によって把握するところのものであって、この場合、ロゴスは様々の仮説(ヒュポテシス)を絶対的始原とすることなく、文字通り(下に(ヒュポ)置かれたもの(テシス)となし、言わば踏み台として、また躍動のための抛り所として取り扱いつつ、それによってついに、もはや仮説ではないものにまで至り、万有の始原(パントス・アルケー)に到達することになる。そしていったんその始原を把握したうえで、今度は逆に、始原に連絡し続くものを次々と触れ辿りながら、最後の結末に至るまで下降して行くのであるが、その際、凡そ感覚されるものを補助的に用いることは一切なく、ただ(実相) (エイドス)そのものだけを用いて、(実相)を通して(実相)へと動き、そして最後に(実相)に於て終わるのだ。」(51IBC)⁽¹⁵⁾

かくして、図式的に言えば、(4)、「エイカシア」、⁽³⁾「ピステイス」即ち「ドクサー」に於ける〈感覚・知覚の相対性〉と、(2)「ディアノイアー」に於ける〈仮説の独断性〉とを〈揚棄〉して、認識のはたらきとその対象との双方の根拠であり原因である、かの「善のアイデア」への、人間の〈知〉(認識能力)、就中「フィロソフォス」のそのの上昇とそこからの自覚的下降の運動の途筋が呈示されるのである。「浄化されたポリス」モデルに於ける「フィロソフォス」の生涯教育のプログラムは、〈線分の比喩〉で示された「魂」の在り方(認識能力)の諸段階に従い、「魂」そのものの向きを、かの〈可視界〉、生成する可変的相対的世界(4)、(3)で捉えられる世界)から、〈可知界〉、不変的絶対的真実在の世界(2)、(1)で捉えられる世界)へと方向転換(エピアゲイン)させ、(2)「ディアノイアー」と(1)「ノエシス」ないし「エピステーメー」とを形成すること目的とする。このプログラムに従うと、上でも言及したように、二十歳までの音楽・文芸と体育を中心とする「パイディア」を基礎にして、二十歳から三十歳迄に、予備学(「前奏曲」として、(2)に係わる数学・幾何学・天文学そして音楽学(和声学)が、さらにこれを踏まえて、三十歳から三十五歳迄に、「本曲」として、(1)に係わる「ディアレクティケー」(弁証法)が学ばれ、その後五十歳迄は、軍事的ないし行政的実務経験が課される。ここでは、あらゆる現実のポリスの経験を積み、あらゆる試練に耐え抜いた者達だけが、再び哲学的探求生活に復帰する。⁽¹⁶⁾

「浄化されたポリス」モデルに於ては、このように「魂」の適切な生涯教育によりその「素質」を適切に開花させた「フィロソフォス」の中で、あらゆる現実のポリスに於て全く現実性・可能性を持たない、「フィロソフィアー」と「ポリティケー」、政治と哲学との結合が、実現する。この意味での「フィロソフォス」は、この〈ポリス・モデル(3)〉の〈中心点〉或るいは〈頭脳〉である。ここでは、彼は、万有の根拠にして原因である「善のアイデア」を観照しうる能力(弁証法的思惟能力)をへすでに〈獲得して〉おり、まさにそれ故に、上述したような一般的に定義されたポリスの

「正義」(換言すれば、ポリスの「一般意思」)が現実に何であるかを判断し得る能力をへすでに、自らのものにしていく。従って、彼は、このポリスの真実の「統治者」(アルコーン)・「立法者」(ノモテテース)・「指導者」(ヘーゲモーン)或るいは「教育者」となり得るし、ならなければならない。即ち、ここでは、「魂」に於て最も優れた(選り抜かれた)者(アリストス)となった真実の「フィロソフォス」が、ポリス全体に係わる政治的判断ばかりでなく、ポリータイ全体に係わる教育(「魂の世話」、「魂の転回」)任務を担うことになる。かの「洞窟の比喩」で語られているように、彼は、かつて迷妄(誤まてるドクサー)に満ちた冥い「洞窟」から、太陽(「善のアイデア」)が光り輝く地上へと這い出して来たのであるが、今や再び、「洞窟」の中の壁に写し出された影絵しか見ることのできない人々の許へと降りてゆく。無論、闇の世界に蠢く彼等の「魂」(視野)を転回させるために、である。⁽¹⁷⁾

だが、そもそも何故、一端地下の「洞窟」から明るく照らされた地上へと抜け出した「フィロソフォス」が、再びもとの暗い地下に留まる人々のところに帰還しなければならないのか。この他者に対する〈啓蒙〉の必然性そのものは、どこか来るのか。ここでは、哲学者・統治者(政治家)・教育者の役割が一身に担われることになるが、このことは、この「浄化されたポリス」モデルそのものの「正義」として述べられた〈各人が各人の素質に適った各人固有の仕事を果たす〉という一般原則と矛盾しないのか。「洞窟」への再下降の強制は、真実の「フィロソフォス」の「エウダイモニア」を奪うことにならないのか。他者による〈啓蒙〉(「フィロソフォス」による〈大衆〉教育)は〈啓蒙される〉者の内発性を奪うことにならないのか。そして、かの「フィロソフォス」が観照するとされる「善のアイデア」は、「アイデア」の「アイデア」であり、「存在」そのもの(ト・オン)であり、一切の存在者(タ・オンタ)の因って来る究極の根拠とされる以上、それ以上「善のアイデア」とは何か、と問うことは無意味であるが(何故なら、この問いに答えるなら、「善のアイデア」をさらに根拠付ける何かを想定せざるを得ないであろうから)、そもそもかの「フィロソフォス」がこの「善の

アイデア」を觀照し得ているということが言える根拠は何であるのか。

真実の「フィロソフオス」の「洞窟」への再下降の必要、自己へ啓蒙（魂の転回）を果たした彼が他者（自余のポリタイ、へ大衆）（ポッロイ）のへ啓蒙に係わらなければならない必然性（アナカイアー）は、プラトーンの議論に従えば、次のことから帰結する。即ち、この「フィロソフオス」はもともとと言わば「浄化されたポリス」の生涯教育へ制度の所産なのであり、自己形成を遂げた「フィロソフオス」は、この「ポリス」から受け取っただけのものを、それを与えてくれた「ポリス」に返済するのは当然なのである。(520B)⁽¹⁸⁾だが、その必然性は、へ借りたものを返す」といったことよりも、上述したような「社会的・歴史的存在」としての人間存在の在り方そのものから帰結する、と言ったほうがより適切であろう。

上述したように、「浄化されたポリス」は、あくまでも「ロゴス」に於て構想された「範型」であり、その言わばへ制御中枢たる「フィロソフオス」も、その意味で「範型」であるが、前者の完成されたへ構成秩序と後者の「魂」のそれとは、構造的に「類比」されるばかりでなく、相互に制約し合っている。しかも両者のへ構成秩序は、不断に再生産されるへ動的均衡秩序である。かてて加えて、それらはともに言わばへ開放系であり、それぞれにはへ発展と同時にへ墮落の可能性を潜在させている。それ故に、「フィロソフオス」に於ける「弁証法的」認識過程にへ可視界からの上昇とへ可知界からの下降との両過程があるように、「浄化されたポリス」に於ける言わばへ類のポリス的（社会的）再生産過程には、統治者・教育者としての「フィロソフオス」の上昇過程と下降過程の両面が必要なのである。いずれにしても、ここでの問題は、「ポリス」を構成する諸個体の「幸福」か或るいは「ポリス」全体のそれかの二者択一ではなく、両者の関係に於けるそれなのである。従って、現実の「ポリス」に於てへ哲学者と称される人々は、必ずしもへ教育者ではないし、況んやへ統治者ではないが、「範型」としての「浄化されたポリス」に於ける「フィロ

ソフォース」の中では、その存立の在り方からして、決して〈哲学〉・〈政治〉・〈教育〉が分離することは在り得ないのである。

「フィロソフォス」による〈啓蒙〉或るいは「教育」に就いて言えば、それは、ソフィスタイのように、即ち「あたかも盲人の目の中に、視力を外から植えつける」(518C)⁽¹⁹⁾のように、外から「魂」の中に知識を植えつけるのではなく、寧ろ各人のその中にもともと潜在する諸能力を内発的に顕在化させることである。「一人一人の人間が持っている(真理を知るための)機能(デュナミス)と各人がそれによって学び知るところの器官(オルガノン)とは、はじめから魂のなかに内在しているのであって、ただそれを――あたかも目を暗闇(スコトス)から光明(ト・ファーン)へ転向させるには、身体の全体と一緒に転向(ストウレフェイン)させるのでなければ不可能であったように――魂の全体と一緒に生成流転する世界から一転(ペリアゲイン)させて、實在(ト・オン)および實在のうちにも最も光り輝くもの(ト・オン・オントス・ト・ファーン・タトン)を観ることに堪え得るようになるまで、導いて行かなければならない。」(518C)⁽²⁰⁾

さて、「浄化されたポリス」に於て自己形成・自己開花を遂げ、この「魂の転回」(ヘー・テース・フシケース・ペリアゴーゲー)をすでに果たしている、眞実なる「フィロソフォス」が、この「ポリス」の「統治」(アルケイン)とその構成員の「教育」(パイデウエイン)ないしは公的〈啓蒙〉に係わることが必然であるのは、上述のように、このモデルに於ては、この「ポリス」とその「フィロソフォス」との成立(存立)が、相互に他方を前提にし合っているからである。だが、そうだとすれば、このモデルに於ては、明らかに論理は〈循環〉している。このモデルそのものを根拠付けるのは何かと言え、それは、それは實在そのものの究極の根拠・原因としてのかの「善のアイデア」以外ではありえない。これは、こういうものである以上、これ以上これが何であるかに就いて問うことは、少なくとも、モデルとしての「ポリス」ではなく現実の「ポリス」に生きる人間にとっては、原理的に無意味である。しかしながら、「ゾーイオン・

ポリテイコン」としての、或るいは“homo loquens”としての人間の〈言語〉・〈認識〉・〈行為〉を成り立たしめる、コントラ・ファクティシュな一般的前提条件はいつもすでにあるはずであり、それらに自己言及しながら、一方で前提の前提に遡及し、同時に他方で、不断に出発点に立ち戻ってくるという、思惟の往還運動によって、現実の「時間」の内
に於て、「ゾーイオン・ポリテイコン」としての人間存在を根拠付ける、何らかの倫理的原理があるはずだ、と考え続けることは無意味ではあり得ないであろう。

思惟活動はいつもすでに「ディア・ロゴス」である。自己の内部に於ても、同時代の他者との関係に於ても、時代を越えた世代間の関係に於ても、「ディア・ロゴス」の可能性が開かれているかぎり、真実（アレーティア）を問う哲学的営為（フィロソフエイン）の已むことはないであろう。「高尚で自由な討論（ロゴイ・カロイ・テ・カイ・エレウテロイ）、知ること（グノーナイ、ギグノスケイン）を目指し、あらゆる努力を尽くして只管真実だけを追求するような討論、そして、法廷に於ても個人的な集まりに於ても只専ら思惑や口論（エリス）を目標とする、手の込んだ論争技術めいたものは、一切敬遠するような討論」⁽²¹⁾ — 真実（ト・アレーテス）を追究するという以外の如何なる強制からも解放された「討議」(Diskurs) のため前提条件としての所謂「理想的発話情況」(“die ideale Sprechsituation”)⁽²²⁾ は、かの「パラダイクマ」としての、「浄化されたポリス」やその「フィロソフォス」と同様に、或る意味では、如何なる現実の歴史的「時間」の内にも存在していない。しかしながら、人間が、上述のような意味で、「ゾーイオン・ポリテイコン」であり、“homo loquens”であるかぎり、人間の〈認識〉と〈行為〉⁽²³⁾ には、それらの可能性の前提条件として、所謂「対話合理性」が、別の意味で、へいつもすでに存在しているはずである。とすれば、「ディア・ロゴス」の可能性が「永劫の時間」の中で開かれているかぎり、所謂〈哲人王論〉の理念の実現可能性を全く否定することはできないし、全く否定する必要もないであろう。

注

II. 2. (3) [2]

- (1) PLATONIS OPERA IV., *RES PVBBLICA* (BURNETT), 405B, プラトン『国家』(藤沢令夫訳、岩波文庫)(上)′ 二二一七頁～二二二八頁。
- (2) Cf. PLATONIS OPERA IV., 376E～412B, 前掲書′ 一五三頁～二四四頁参照。
- (3) Vgl., Hegel, G. W. F., *Phänomenologie des Geistes* (Werke 3, Suhrkamp), S. 137～155
- (4) Cf. PLATONIS OPERA IV., 414B et seq., プラトン『国家』(藤沢訳)(上)′ 二五一頁以下参照。
- (5) PLATONIS OPERA IV., 415B, 前掲書′ 二五三頁。
- (6) Cf. ibidem, 535A～541C, 前掲書(下)′ 一四九頁～一六五頁参照。
- (7) Cf. ibidem, 413A～E, 前掲書(上)′ 二四七頁～二五〇頁参照。
- (8) ibidem, 412DE, 前掲書(上)′ 二四六頁～二四七頁。
- (9) 本稿′ I. 2. (大東法学′ 第三卷第二号)参照。
- (10) 本稿′ I. 3. 4. 参照。
- (11) 本稿′ I. 4. 参照。
- (12) 本稿′ II. 1. 参照。
- (13) Cf. PLATONIS OPERA IV., 415D～421C, 前掲書(上)′ 二五四頁～二六四頁参照。
- (14) PLATONIS OPERA IV., 416B, 前掲書(上)′ 二五六頁。
- (15) ibidem, 416E～417A, 前掲書(上)′ 二五七頁～二五八頁。
- (16) Marx, K., *Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844*, in: MEW. Ergänzungsband I, S. 534～535 「空想な共産主義者とは′ 空想された最低水準を出発点として′ この嫉妬と平均化とを完成したものに他ならぬ。」
- (17) Vgl. Arendt, H., *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, München, 1981, S. 18～S. 23; Habermas, J., *Arbeit und Interaktion*, in: *Technik und Wissenschaft als Ideologie*, S. 9～S. 46
- (18) PLATONIS OPERA IV., 463B, 前掲書(上)′ 二二六頁。
- (19) ibidem, 423D, 前掲書(上)′ 二二〇頁～二二二頁。

- (20) *ibidem*, 423CD, 前掲書(上)′二七〇頁。
- (21) Cf. *ibidem*, 421D~422A, 前掲書(上)′二六五頁~二六七頁参照。
- (22) *ibidem*, 423C, 前掲書(上)′二七〇頁。
- (23) *ibidem*, 421A, 前掲書(上)′二六三頁。
- (24) *ibidem*, 431C, 前掲書(上)′二九三頁。
- (25) *ibidem*, 420B, 前掲書(上)′二六一頁。
- (26) *ibidem*, 421C, 前掲書(上)′二六四頁。
- (27) *ibidem*, 472E, 前掲書(上)′四〇四頁。
- (28) *ibidem*, 427E, 前掲書(上)′二八二頁。
- (29) *ibidem*, 428D, 前掲書(上)′二八五頁。
- (30) *ibidem*, 428E~429A, 前掲書(上)′二八六頁。
- (31) *ibidem*, 429BC, 前掲書(上)′二八七頁。
- (32) *ibidem*, 429CD, 前掲書(上)′二八八頁。
- (33) *ibidem*, 430B, 前掲書(上)′二八九頁。
- (34) Cf. *ibidem*, 431C, 前掲書(上)′二九三頁参照。
- (35) *ibidem*, 432A, 前掲書(上)′二九四頁。
- (36) *ibidem*, 433A, 前掲書(上)′二九七頁~二九八頁。
- (37) *ibidem*, 433B, 前掲書(上)′二九八頁。
- (38) Cf. *ibidem*, 441A, 前掲書(上)′三二二頁参照。
- (39) *ibidem*, 443D, 前掲書(上)′三二九頁。
- (40) 『初期ギリシヤ哲学者断片集』(山本光雄訳編)′岩波書店′二十二頁~二十三頁参照。 Cf. PLATONIS OPERA IV, 617 B.

II. 2. (4)

- (1) PLATONIS OPERA IV, 472D, 前掲書(上)′四〇二頁。
- (2) *ibidem*, 473A, 前掲書(上)′四〇三頁。

- (3) ibidem
- (4) ibidem
- (5) ibidem, 473B, 前掲書(上)‘四〇四頁’。
- (6) ibidem, 473DE, 前掲書(上)‘四〇五頁’。
- (7) Vgl. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts* (Werke 7, Suhrkamp), S. 49ff.; *Phänomenologie des Geistes* (Werke 3), S. 431ff.
- (8) Cf. PLATONIS OPERA IV., 492A ~ D, 前掲書(上)‘四十一頁 ~ 四十二頁參照’。
- (9) Cf. PLATONIS OPERA I., APPOLOGIA.
- (10) Cf. ibidem.
- (11) PLATONIS OPERA IV., 505E, 前掲書(上)‘七十四頁 ~ 七十五頁’。
- (12) ibidem, 504D, 前掲書(上)‘七十一頁’。
- (13) ibidem, 509C ~ 511E, 前掲書(下)‘八十五頁 ~ 九十二頁’。
- (14) ibidem, 511D, 533D ~ 534A, 前掲書(下)‘九十一頁 ~ 一四六頁’。
- (15) ibidem, 511BC, 前掲書(上)‘九十頁’。
- (16) ibidem, 534A ~ 541B, 前掲書(下)‘一四六頁 ~ 一六五頁’。
- (17) ibidem, 514A ~ 521B, 前掲書(下)‘九十四頁 ~ 百十一頁’。
- (18) Cf. ibidem, 520B, 前掲書(上)‘一〇八頁 ~ 一〇九頁參照’。
- (19) ibidem, 518C, 前掲書(上)‘一〇四頁’。
- (20) ibidem
- (21) ibidem, 499A, 前掲書(上)‘五十六頁’。
- (22) Habermas, J., *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*, Ffm., 1984, S. 174ff.
- (23) Vgl. Habermas (1984), S. 127 ~ S. 183; Apel, Karl-Otto, *Diskurs und Verantwortung*, Ffm., 1988